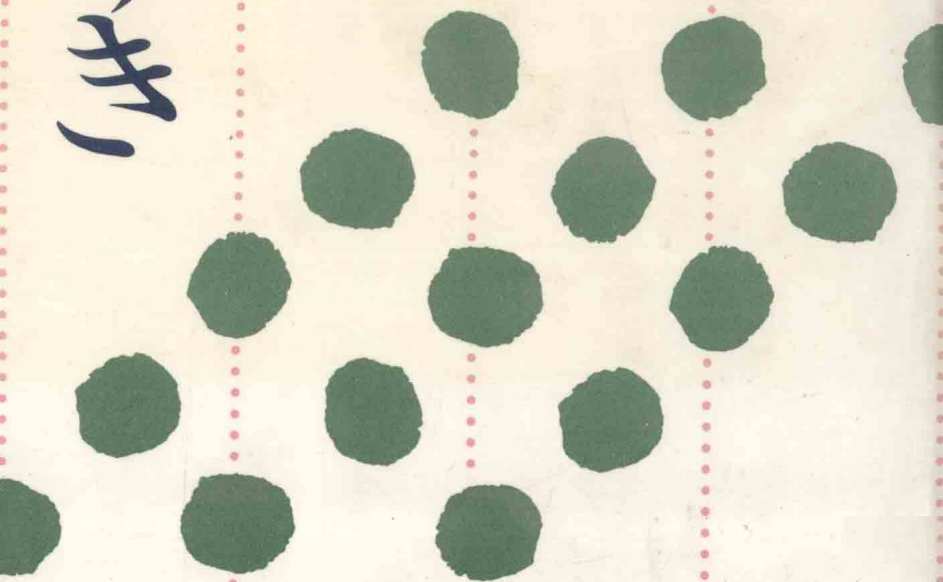


玉川よ志子

終わりに

言葉なき

ことばありき



玉川よ志子

終わりに

言葉なき

ことばありき

終わりに言葉なきことばありき

定価＝1100円

一九八三年五月二十五日 第一刷発行

著者——玉川よ志子

装幀——山岸義明

© Yoshiko Tamagawa 1983, Printed in Japan



発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—四四—二三 (大代表) 振替東京—元〇〇

印刷所——慶昌堂印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本は、御面倒ですが、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN4-06-200525-5(0) (学々)

終わりに言葉なきことばかりき

死へと歩み行く夫(患者)と

支えた妻(看護者)の間の類ない千の通話

これは、まったく、これまで誰の手によっても書かれることのなかった日常性を高く超えた人間が、かつてない深いところで、かわり合い、つながり合い、結び合ったその関係をじつに精密な分析力を伴い、しかも、なおかつ人間の奥底のところに生き、たえず波打つ微妙きわまりないリズムとしてある生と死を決してそこなうことなく、引き出すことに成功した書物である。

これはアンデス山中に航空機が墜落し、そこですすめられた人肉食いのような異常な事件をとらえた著述でもなく、沈みゆく戦艦の内外にひろげられる悲慘を通りこした事件を描いたというような著作でもない。

しかし夫が進行性筋萎縮性側索硬化症発病入院以来十三年間、看護にあたってきた、その体験を、あらゆる角度からとらえ、明るみの下に置き、その文章は一見平凡であるかのようにみえて、人間の見方を根底から変えるような力を備えている書物である。

先に書いた病名をあげただけでは、病状は解らないが、食事をし食物を飲みこむことが出来な

くなり、だ液はたれ流し状態となって、ついに、食物を摂取するため胃に管を入れる手術をし（栄養問題）、ついには呼吸困難に陥り、気管切開の手術後、人工呼吸器（生命維持装置）を気管に挿入したのである（生命系問題）。

夫（患者）はこの気管切開の手術後、指を動かすことがまだ少々可能だったが、あお向きに寝たままなので、妻（看護者）の〈私〉には、夫の両方の手を見て、何を意向したいのか読みとれず、四番目に考えだした手段、右足で五十音とABCの文字盤をさす方法を考えつく。縦三十センチ×横四十センチの厚紙の文字盤をつくり、左手で夫の右足を支え右手で文字盤をもち、夫の右足で文字盤の文字をささせるのである。

しかし、夫の眼球の動きは悪くなり、夫は自分の足先の方を見ることが出来なくなって、ついにこのようなコミュニケーションの方法では、夫との対話は出来なくなった。

ついで天井に鏡をつるし文字盤を鏡にうつし、夫がそれを見ることが出来る方法。さらにつづいて、くわしくは書けないが、ブザーを押す方法などが考案される。しかし、ついにそれもだめになり、最後には、患者（夫）の肛門の動きにより、その意向を読み取り、こちら（妻）の思いをつたえる方法がとられる。

このようなじつに困難な看護の日々の努力のなかから、夫と患者、妻と看護者という二重性、またその距離が精密に狡智さえ備えて測定される。そして同時にその間隔が一挙にちぢめられ、取り去られながら、しかも柔軟きわまりない意識から愛が、両者の間にたち働き生死の間を往き

来する詩が生まれ、生とは何か、病とは何か死とは何かが問いつめられ、ここに記述される。

そして今日の医療、看護だけではなく生命系と社会経済体系におけるエントロピーの問題に突き当たっている高度の問題が提出され、現代の人類の直面している多くの危機を、人類が越えることのできる多くの精神と肉体の真の在り様の重要な一つがここに引き出されている。いろいろ注文をつけたい思いがないわけではないが、読む方々が出て頂きたい。

まことに類^{たぐい}のない貴重な精神の書である。

一九八三年四月

野間 宏

目次

序文

第一部 表現を奪われた極限の日々を

第一章 「生きていて」と願うことが愛であった

11

生―病―死 「生きること」の意味 表現について
私的カルテ 病氣経過の概略

第二章 難病の宣告を夫には隠して

25

出会い 「異常」は結婚生活四年めにはじまった 母
の死に号泣する夫に感情失禁を見る 病氣の原因不明
のまま休職へ 民間療法にかすかな願いを託して よ
うやく病名が判明、それはつらい宣告だった

第三章 沈黙の世界へ

愛憎半ばする中で生まれた夫婦の絆 「貧乏^{ブツ}は はずかしいことではない おじいちゃんの ばか」 ついに食事がのどを通らなくなる日が…… 夫が流した私への愛の涙 父子水いらずのつかの間の幸せ 足指すら動かなくなる日も予想して 「終末論」への最後の知的質問 父の死の知らせに夫は泣くこともできなかった

47

第二部 極限の日々からの解放

第一章 奇蹟と祈り

人工呼吸器とのたたかい 病人の日課を人間らしく多忙な病院生活に順応して 奇蹟の日々を生きて 人間はどれほど耐えられるか

83

第二章 生命の尊厳のために

99

病院の看護体制　つらい看護を一人でやり通す決意
完全看護への疑問　だれのための看護か

第三章　苦しみからの解放

115

消化器からの大出血をのりこえて　長い間、苦しい思
いをさせて……　看病を終えて　インシデントをめぐ
って　勇者は去った、駆け足で

第三部　勇者への鎮魂歌^{レクイエム}

第一章　死体報告^{モノローグ}

153

死と生命について　病院の解剖所見（抜すい）　解剖
所見に対する主治医との問答^{ダイアログ}　私を慰めてくれた
医師の手紙

第二章　解明されない無念さ

181

「解剖所見」に対する妻の表白^{モノローグ}　「ナースの「イン
シデントレポート」

第三章 未来への旅立ち

197

解剖学教授との対話^{ディアル}
病氣 死体独白^{モル} がんよりつらい

エピローグ

219

あとがき

第一部

表現を奪われた極限の日々を

人間は いったい どれほど 沈黙に耐えられるものだろうか

人間は いったい どれほど 食物を味わわずに生きていられるものだろうか

人間は いったい どれほど 空間を移動せずにいられるものだろうか

その呼吸さえも人工呼吸器によって

ただ 意識のみ正常にして……

第一章 「生きていて」と願うことが愛であった

生―病―死

人は病氣になって、はじめて健康のありがたさを知る。わざわざいうまでもないことである。

だが病氣といっても実にさまざまで一見優雅な場合さえある。病氣によってある期間、心身ともに休養が与えられるということもある。ともかくだれも病氣は敬遠したいし、また健康でありたい。いずれ死ぬ存在であり、生きるものが死ななかったためしはない。この「生・死」と「病氣」との関係について、ミッシェル・フーコーは次のようにいう。

「……………中略……………人間が死ぬのは、彼が病氣になったからではない。人間が病氣になることがあるのは、根本的にいって、彼が死にうるものだからである。……死はあるまなざしを持ってじっとしているもののようにみえた。……つまり生命に内在する可能性であって、しかも生命より強く、生命を消耗させ、歪め、ついに消滅させる可能性としてあらわれる。……生―病―死という三位一体は、一つの三角形にむすびつき、その頂点が死であった」(ミッシェル・フーコー『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳)

ここに、難病進行性筋萎縮性側索硬化症で発病以来十一年(一九七九年五月現在)、表現を奪われ、入院(気管切開、人工呼吸器使用、胃にチューブを挿入)以来六年半、瞬時も「沈黙の不安」、「死の不安」から解放されることのない者のごく一端を紹介するものである。

人間にはもろもろの機能がそなわっていて、どの一つが欠けても、その不自由さは正常人の思

いはかる以上のものがあろう。私ども夫婦は夫がもろもろの機能を失ったことによって、はじめてその存在を、またその真価を知るにいたった。そのことはさらに私どもに、人間とは、存在とは、すなわち「生きる」とは何か」ということを考えさせずにはおかなかった。いわば失ったことが原点となった。

夫の場合、運動機能のすべてを失ってしまったが、その中でも生きてゆくうえで、もっとも困難を感じたのがコミュニケーション（意志伝達、交信、会話）とその手段の問題であった。

「生きる」との意味

巷間の一介の主婦にすぎない私が哲学的、医学的な「生きること」の意味についての考察を記すというわけにはいかない。また、哲学や医学の勉強をしていない者が哲学的、医学的考察ができるはずもない。

夫は生きてゆくうえで必要な機能を失ったことによって、看護者である私に種々補ってもらわなくてはならない。

ただ、それを補われる側と補う側との苦難の日々のうちにあって、あくまで経験から得た「生きること」の意味についての考察であることを、まずおことわりしておかなければならない。

①肉体的（生理的）

同化作用（呼吸（酸素）吸入
食物（栄養）摂取

異化作用（吐気排泄（たんなど。健康人は吐く息とともに老廃物を排出しているとのこと）
排泄（大小便、汗、あかなど）

睡眠——（他人によって代行され得ない）

空間における移動——運動、運動機能

時間の推移——人智の支配、人間の意志に関係なく経過

②精神的（意識・精神活動）

いわゆる形而上的（メタフィジカル）なもの（意識・精神活動）をもって人間を動物と区別し、それが人間の人間たるゆえんである。主として脳に関係する病気にあがちな意識、精神活動のあるなしが問題となり、「植物人間」の呼び名も生まれてくる場所である。それでも、神秘的な生命のいとなみは前者①のような形而下的（フィジカル）（肉体的）な意味だけで生きていることを続ける場合もある。

③社会的（コミュニケーションが媒体）

人間は孤独では生きられない。生きるためには社会関係の中に身をおかなければならない。その関係をつくるものとなるのはコミュニケーションである。すなわち、コミュニケーションなしに人と人との関係は成り立たない。社会関係とは人と人との関係がおりなすものである。意識があってもコミュニケーションができないことは、ソーシャル コミュニケーション *social communication* が欠如するということ